

青年の経歴形成と学習

新井 眞 人

(秋田大学)

1. はじめに

ここでの主題は、経歴形成に果たす学習の役割をわが国の男子青年について究明することである。

経歴 (career) とは、生育歴、教育歴 (学歴)、職業経歴 (職歴)、結婚歴、地域社会における団体活動歴など、人々が生涯においてたどる履歴をさす。人々がたどるこれらの履歴をまとめて社会的経歴 (social career) と呼ぶこともある。

経歴の研究には、職業経歴 (occupational career) を主題としたものが多い⁽¹⁾。職業経歴とは、転職による勤務先や職業の変化、勤務先での配置転換や昇進などによって生ずる職業上の地位や役割の変化などを示す履歴のことである。職業経歴を主題とした研究は、大別して2つある。1つは人々の職業経歴のパターンを究明したもの。もう1つは職業経歴の形成過程を究明したもの。以上が、それである。本稿は経歴パターンの究明よりも、経歴の形成過程を究明するので、後者の立場に近い。また研究方法は事例研究法による。

ところで人々の職業経歴は、学歴や初職によって影響されることも多い。新規学卒者の就業分野は学歴によってかなり制約を受けるし、学歴や初職が就職後の社内・社外の教育機会、あるいは配置転換や昇進などに影響する場合もあるからである。もちろん職場によっては学歴よりも直ちに使える人材ということで、実力を重視した能力本位の雇用管理や中途採用を行う所もある。

また職業経歴の転機には、資格取得とか転撤手の役割を果たすような人との出会い、あるいは集団間の競走や争いなども作用する。

例えば内航海運で働く船員の場合、船会社間移動 (転社) は、先輩・友人などの人づてによる場合が多いし、企業内移動 (配置転換や昇進) は就職してから

実務経験（OJT）と自己啓発による資格取得に依存するものであった。⁽²⁾

またライフ・ヒストリーの事例分析から日本人の社会的経歴を究明した研究によれば、学歴や職歴という「外面経歴」と精神的な「内面経歴」は、「個人主義」と「人間主義」という個人の対人関係のあり方や、経歴の転機に影響する重要な人間（referent person）とのかかわりにおいて形成されるという。⁽³⁾

さらに派閥や集団（イエモト）間の競走が個人の経歴に影響し、「代表移動」というかたちで経歴形成がなされることもある。⁽⁴⁾

このように経歴は学歴や初職をはじめとする多様な要因に規定されるが、ここではとくに経歴形成に果たす学習の役割を青年期に限定して究明する。なぜ青年期に焦点を絞ったかといえば、転職経験が青年期に集中していることからわかるように、青年期は職業的発達段階の探索期にあたり、職業人としての「自分探し」がなされる時期であるということ。また生涯教育（学習）の見地からみたととき、「自分探し」に伴う青年の学習が、その後の経歴形成にどう影響するかを究明することは重要と思われるからである。

2. N 青年の経歴形成と学習

1) 事例分析の意図と方法

ここでは一人のNという青年の自己形成史を事例に即してとり、その教育歴や職業経歴の主体的形成過程と学習の役割について究明する。分析方法は、N氏の自己形成史を出来るだけN氏の立場に即して理解（解釈）し、経歴形成過程として捉え直すことである。

N氏の事例を取り上げる理由は3つある。

第1に、青年期の自己形成史が詳細にわたって記述されている。⁽⁵⁾

第2に、その経歴は例外的ケースとってよいが、その「自分探し」過程は、現代青年の経歴形成過程を究明することにも役立つ。

第3に、N氏は少年時代から向学心に燃え、「独学」を実践してきた。したがってN氏の事例分析によって、生涯学習社会における青年の主体的経歴形成と学習のあり方を究明する糸口が得られると期待できる。

2) 経歴形成過程の分析

千葉県市川市で1925年（大正14）に生まれたN氏が、28歳で職業人として自立するまでの過程をたどると次のようである。

(I) 11歳で断念させられた中学進学

N氏の父親は典型的な大工職人で、「職人の子は職人になるのがいいのだ」と信

じていたし、「職人の子に学問はいらない」とも考えていた。しかしN氏は、当時の職人階級が社会的に認められていないと感じていたので、中学進学を強く望んでいた。当時、義務教育は尋常小学校6年までで、卒業後、中学校・商業学校などへ進学したのは、約2割であった。

結局、N氏の進学希望は、家の中で絶対的権威をもつ父親によって、むげに打ちくだれる。N氏が11歳のときのことであった。

中学進学を断念させられたN氏は、小学校付属の高等科に2年いくことになる。そこでは卒業後の就職に有利なようにとの配慮から、放課後、先生が全くの無償で生徒にソロバンを教えてくれ、N氏も珠算2級の免状をとれたという。だが、N氏は、「ソロバンで生きていこうとする気は全くなかった。なんとかしてもっと学ばねばと思っている少年の一人だった⁽⁶⁾」という。

(2) 工員や職人でない「自分探し」へ

高等科を卒業したN氏は「2年間『官費』で勉強できる」という先生のすすめで、横須賀の海軍航空廠技手教習所に入学する。そこは全寮制で、海軍の専門工の養成を目的としていた。午前中に学課があり、午後は実習であった。生徒のほとんどは農村の次三男であった。2年間学ぶと「技手」の資格をもらえた。

だがN氏はこの教習所になじめなかった。親にも相談せず半年でそこをやめる。その理由は次の3点であった。

- ①教習所の学課では自分の学びたいものが学べない。
- ②教習所の軍隊式教育がいやであった。
- ③実習でつれていかれる工場の作業風景や、そこでの歯車のような仕事になじめなかった。

教習所から帰郷したN氏に、「父は何も言わなかったが、母は『おまえは何事にも辛抱がないからね』とぐちをこぼした」という。

そんな息子に父親は、大工仕事の手ほどきをするようになる。N氏は父親の仕事を手伝いながら、嫌っていた大工の手仕事を尊敬するようにまでなるが、相変わらず大工になる決心がつかない。そして「独学」と称し、中学に通う親友をまねて、同じ教科書や参考書を勉強するのだが、それは「当てもない独学」であった。親友は、中学を4年で修了し、さらに陸軍士官学校へ進学する。N氏は「置き去りにされた自分」の立場の惨めさをかみしめることになる。当時15歳であった自分の不安定な心境を次のように語っている。

「内から衝きあげる性的欲望と、社会で自分は何になれるかとの不安がからみあった、あれはまことに恐ろしく不安定な、思いだしても苦しくなるような年頃なのである⁽⁷⁾」。

やがて暗中模索のN氏に一筋の光がさす。中学校にいけなかった者に中学校卒と同じ資格を与える「専門学校入学者資格検定試験（専検）」という制度のあることを知る。それによってN氏の「当てのない独学」は「専検を目指す独学」になる。「専検」でいくつかの課目にも合格する。16歳の頃であった。

受験勉強に励むかたわら読書にもふける。河合栄治郎編『学生と読書』『学生と生活』の巻末にある「学生必読書目」を参考に、古本を探し、むさぼり読んだという。その結果「西洋」的教養にひかれるようになる。

また「専検」よりも受験課目数が少なく、高等学校の受験資格の得られる「高等学校入学者資格検定試験（高検）」という制度のあることも知る。「街中で幣衣破帽の高校生を見るたびに、自分もああいう自由で教養を追求する身になりたい」と願っていたN氏は、「専検」をやめ、新たに「高検」を目指し、1日14時間の勉強を開始する。

その努力は翌年の17歳の春に報われた。「高検合格」の証書が県庁から届いたときの喜びを、N氏は次のように語る。「それが少年が社会から得た最初の証明だった。中学校に入学した者たちが卒業するその年に、ばくも自力で1つの足場を手に入れたのだ」⁽⁸⁾。

高等学校を受験する資格は得たが、合格するためにはさらに実力をつける必要があった。予備校に通いたいのが、父親の許しがある。老眼鏡をかけて合格証書を眺めている父親が、しゅしゅながら予備校にいくことを許してくれたとき、N氏は「高検」に合格したときよりもうれしかったという。それはN氏が、もはや大工にならなくてもよいことを意味した。

(3) 予備校入学・一浪・五高入学・学徒動員・召集

予備校でのN氏は、模擬試験で10位以内に入る常連となる。だが高等学校の壁は厚く、松本高校の2次試験の面接で落ち、絶望する。N氏は諦めきれず、もう1年の予備校生活を父親に頼み込み、許される。

翌年、19歳で熊本にある五高の文科に合格する。そこでは授業や成績よりも寮生活が重視された。知的に同じレベルの若者同士が互いにもみ合い磨き合う寮生活で、N氏は自分を知ることが出来るようになった。

「……なによりもそれは、自分の体力、知力、性格、気質、好みなど、一個の人間として総合的に自分というものを、いやおうなしに認識する機会を与えてくれたからである。ばくは自信を持ったり喪失しながら、次第におのれが何者であるのかを知るようになった」⁽⁹⁾。

だが、高校生活も束の間のこと、1945年1月に学徒動員、5月に召集され、終戦まで軍隊生活を過ごすことになる。

(4) 五高から東大文学部独文科へ

1945年（昭和20）11月から高校生活が再開される。今度は下宿生活であった。そして熊本の3年間で、N氏が本当に学んだのはドイツ語だという。だから、別にドイツ文学がとくに好きだったわけではないが、大学にいくなら独文科に行くしかないと思っていたようだ。

1947年の春、22歳のとき、東大文学部独文科に入学することになった。敗戦の壊滅状態の中で、就職先も乏しく、在学中から就職を考える者もないし、授業も文科の学生にはどうしてもよかったようだ。N氏は、関心のない授業には出席しないことも多かったが、優秀な友人たちとの交わりの中で、好きなドイツ文学をやった。「好きな作家の作品を読むこと、日本語でそれを表現することには、だれもが精魂をつくした⁹⁹」とN氏は語っている。N氏の大学生時代は、自活のためのアルバイトとドイツ文学で明け暮れていたようだ。

以上(1)～(4)は、N氏の教育歴の形成過程であるが、それは進学した親友や目標を同じくする同世代の仲間をモデルとした自己形成史であった。あくなき「自分探し」に伴う主体的学習活動が、N氏の教育歴を形成したと理解できる。

(5) 就職・解雇・再就職・倒産・大学教員へ

1950年に25歳で大学を卒業し、G書房に就職。G書房は大学3年のときからのアルバイト先であった。解禁の近い外国書輸入をあてこんでつくられた会社で、社員はN氏一人であった。N氏は就職したてのころの仕事について、次のように語っている。

「ドイツから送られて来たおびただしいカタログから注文書を選択し、先方の書籍輸出業者に発注の手紙を書き、外貨割当を受けるために通産省に通い、輸入に関する手続きの一切まで、何もかも一人でやらねばならなかったが、それだけにやりがいもあった¹⁰⁰」。

しかし洋書の輸入業者になるために、N氏がG書房に就職したとは理解できない。ドイツ文学に少しでも触れていられる職場であることに魅力を感じ、将来ドイツ文学で生きるための一時凌ぎの手段としてG書房に就職したと理解できる。例えば次のようなN氏の回顧談からも、そう判断できる。

「勤めだして何カ月目かによく注文したドイツ書が到着したときの感激は大きかった。戦時中途絶えたままになっていた外国書がいま初めて輸入されたのであり、それを最初に手にするのは自分なのだった。まだ印刷の香も生々しい新刊本を、しかもかつて尊敬する詩人や作家のそれを、ぼくは一冊一冊興奮とともに手にとった。到着した中には新しい文芸雑誌もあり、そこに盛られた戦後のドイツ文壇消息をぼくはこれを最初に読むのはおれなんだぞと感激をも

ってむさぼり読んだ。そこにはぼくの知らないフランツ・カフカという作家のことも記されていた¹²⁾」。

このようにドイツ文学への関心が強いから、輸入業務がスムーズに運びだしルーチン・ワーク化してくると、「おれはいま本当にしたいことをしていない」と悩むことになる。

ついに勝手に会社を休み、カフカの本を読み、国会図書館に出かけるようになる。社長との間もぎくしゃくし始める。社員が一人増え、G書房の仕事も軌道にのりですが、勤めだしてちょうど1年3カ月が経った日に、勤務態度の悪いことなどを理由にN氏は解雇される。26歳の夏のことであった。この解雇でN氏は実社会の厳しさを実感する。好きなドイツ文学に触れられる機会があるということだけで、安易にG書房に就職した甘さを反省したと理解できる。

3カ月ほど失業していたが、先輩の世話で銀座の小出版社に勤めることができた。「今度は完全に食うための就職だったから、最初から死んだつもりで働いた¹³⁾」とN氏は語る。だが、その努力にもかかわらず、会社が1年後に倒産してしまう。N氏は短期間に2度にわたる失業を経験し、そこから「…食うための職は職として、自分の一番したいこと（それはぼくの場合は文学だった）をやりつづけるしかない¹⁴⁾」と将来の自分の職業を明確に自覚するようになった。

一般的に「やりたい仕事」と「食うための仕事」の完全一致は少ないが、N氏の場合、1952年に大学のドイツ語非常勤講師となり、翌年専任講師となる。28歳のことであった。

3. 現代青年の経歴形成と学習

N青年の経歴は、教育歴と職業経歴の2つの部分から構成され、また教育歴は職業経歴に影響していた。以下ではN青年の事例分析をもとに、現代青年の経歴形成と学習について究明する。

1) 教育歴の形成と学習

N氏の教育歴は、「高検」合格まで→予備校時代→五高時代→大学時代と整理できるが、質的には2分できる。前半は受験勉強時代で、後半は高校・大学時代である。そして学生時代は、教育歴の形成過程でありながら、同時に職業経歴の形成過程ともなっていた。

ところで受験勉強を成功に導いた要因はいろいろあった。N氏の能力と強い向学心のほに、数年間にわたるモラトリアム状態を許容した両親、中学に進学した親友、独学を方向づけた「専検」、高等学校受験を動機づけた「高検」と読書で知

った「学生生活」、予備校での受験勉強などが、それである。しかし「専検」や「高検」という制度がなかったら、N氏の教育歴は別のものになっていたであろう。

当時、大学への道は、小学校→中学校→高等学校→大学という正規の進学ルート以外に、バイパスルートがあった。実業学校・師範学校・専門学校といった傍系学校からの進学ルートや、N氏のたどった検定試験経由の進学ルートがあった。

今のように中等・高等教育が普及していない時代には、少数ではあったが、N氏のように正規のルート以外から自らの教育歴を形成しようとする若者がいた。そうしたバイパスルートの存在は、向学心に燃えた青少年に希望を与えたにちがいない。「専検」や「高検」という制度の存在を知ることにより、N氏の独学が「当てのない独学」から希望に燃えた「目的のある独学」へと質的・量的に大転換したことからも、それは理解できる。

こうしたバイパスルートを知らずに「当てのない独学」に励んだ青少年も少なくないが、身近な人にバイパスルートを教えてもらい、主体的に経歴形成を試みる場合もある。N氏と時代は異なるが、次のT氏の昭和30年代の事例が、それである。

T氏は、1940年(昭和15)、5人兄弟の長男として田畑3反歩の貧しい農家に生まれた。高校進学をしたいが、親に言い出せる経済状態ではない。父親は、中学を出たら、T氏を「鍛冶屋」か「魚屋」の修業に出したがっていた。

卒業直前に、担任の先生が「中学校の給仕がやめたので、君がやらないか」とすすめてくれた。「なんだお茶くみか。後輩がたくさんいるこの学校でいやだな」と思ったが、先生の熱意に負けて引き受けてしまったという。

しかし、そのすすめは先生がT氏の将来を考えてのことであった。「いいか、夜間高校に入学し、卒業したら大学の通信教育で学んで先生になるんだ。君ならできるから、どこまでもやりぬけ!」と激励してくれたという。

T氏の場合、学校や市役所で働きながら順調に学び続け、夜間高校を卒業し、さらに大学も通信教育で卒業した。そしてその後、教師になっている。

T氏は、こうした過去を振り返り次のように語っている。「恩師への感謝の念はもちろんのこと、…環境がこうも人にやる気を起こさせ、苦しさに耐えさせてくれるものだろうか」と。

戦後も高校・大学進学率がそれほど高くない時代には、T氏のように定時制や通信制の教育で学び、自らの教育歴を主体的に形成した勤労青少年もいた。しかし周囲が青少年のそうした学習に理解ある場合は、むしろ少なかったようだ。例えば大手の電気メーカーで養成工として働きながら定時制高校に通う青年ですら、次のように語っている。

「…私が定時制に通学しているのを知った養成所⁰⁹の人は、『養成工は会社で資本をかけて生涯この会社に落着くことになっているのだから、学校に通って教養を高めると、他社に転職すると困るから定時制はやめてしまえ』とおどかした。しかし、『T社』は他社より自由なので、その後黙って続けているうちに現在もう3年も終ろうとしている…」。

昼間働き夜学ぶという青年の二重生活は、本人と企業の双方にとってムリやムダも多かった。その結果、定時制・通信制高校と技能者養成（職業訓練）との連携が試みられ、普及するようになった。しかし高校進学率が、昭和30年頃約50%→同40年頃70%→同50年頃90%と上昇する過程で、定時制高校への入学者も減少し、同時に職業教育に傾斜した「連携教育」も廃れていった。ちなみに現在の定時制は、全日制の高校に進学出来なかった生徒や、高校中退者を収容する教育機関ともなっている。

いまや同年齢層の94%が高等学校に進学する。そして毎年11万人を越す退学者も出ている。それは不本意就学者¹⁰がかなりいることを物語る。現代青年の教育歴形成は、高校進学¹¹の段階で、デッドロックに直面している。不本意就学者の多い高校を、若者にとってポジティブな教育歴形成の場とするためには、普通高校も多様化し、試験や在学中の成績によって高校間・課程間・学科間の移動を可能にしたり、復学権を所有したまま、再受験あるいは就職を自由にできるようにすることも必要ではないか。

また大学進学率は、いまやN氏の時代の中等教育機関進学率の約2倍になっている。「駅弁大学」といわれてからも、さらに大学が増え、学歴インフレーションも進行した。「高校に進むのだって大学に進むのだって、ただなんとなくというような感じで先のことは考えずにやってきた」若者も多い。おまけに受験勉強一筋で、中学・高校時代に友人との共同生活を充分に経験していない青年は、大学に入学し、初めて同世代の仲間と友情を深める過程で、N氏が高校・大学時代に体験したような「自分探し」を一気にさせられているように感じられる。また「自分のやりたいこと」が定まらずに入学した若者の場合は、大学の専門教育が「自分のやりたいこと」と必ずしも一致しないこともある。そのことから学習意欲を喪失したり、自主的に何かを学ぶこともなく卒業し、何年かして大学時代の不勉強を深く反省する若者もいる。

もちろん現制度の中で、主体的に教育歴を形成している若者もいる。高等職業訓練校や専修学校で学ぶ中卒者、大学進学を目指す高校浪人、大学入学資格検定を目指す高校中退者、編入学・転部・転科などを目指す大学生、高校や大学を出てから専門学校で学ぶ青年などは、主体的教育歴の形成過程にある若者といえる。

そうした現代の若者の学習は、N氏やT氏の時代とは異なり、高校教育の準義務化と高等教育の大衆化状況の中でなされているが、やはり青年期の「自分探し」過程の一環としてなされているにちがいない。

生涯にわたり主体的学習が求められる社会では、経歴の基盤造りにあたる青年期に、教育歴をいつでも主体的に形成しなおせる柔軟な仕組みがますます必要となるであろう。それにより青少年は、途中で自分の将来に簡単に見切りをつけたら、自暴自棄になったりせずに、それぞれのスピードで自分にあった学習をし、個性ある教育歴を形成できる。それは、その後の人生においても、職業経歴を主体的に形成する力を養ってくれるにちがいない。

2) 職業経歴の形成と学習

N氏の経歴を想起すればわかるように、何回かの岐路があった。しかるにN氏と同じ岐路に別の青少年が立たされたと仮定すれば、彼はN氏とは異なる職業経歴を形成したかも知れない。以下では、N氏の経歴形成過程の転機をたどりつつ、N氏とは異なる経歴形成の可能性について現代青年の事例をもとに考察したい。

(1) 手仕事を目指す

N氏の第1回目の岐路は、中学進学を父親に反対された小学校卒業時にあった。N氏と同じ岐路に立たされても、もしそれほど勉強好きでなく、頭よりもむしろ手や体を動かすことの方が好きな子どもであったら、どうであつたらう。

例えば工業地域にある中学校を出て大工になったA君（昭和35年当時16歳）の場合、次のようであつた。

父親は建築職を家業とし、従業員も5～6人いた。A君の学校時代の成績は下位であつたが、図工だけはよかった。建築職を選んだのは、図工が得意であつたことと、性格にもあっていると思ったからである。ちなみにN氏と同様、A君も建築職という職業に対する世間の評価を意識し、相当悩み動揺したという。しかし、3カ月位たつと仕事にも慣れ、もともと好きな仕事であるし、手に職をもつことに楽しみを感じるようになっていった。

また昭和55年に都立の工業高校を卒業し、家業であるテントの仕事を父親とやっているB君の場合、入学時の成績はトップクラスであつた。とはいえ普通科へ行ける自信はなかったし、普通科や大学に行って頭を使う仕事につこうとも思わなかった。手に職をつけたいと思い、入れそうな工業高校の機械科を選んだ。結果的に家業に従事することになったが、高校時代に学んだことは、今の仕事にも役立っている。また今の仕事にも満足しているようだ。次のように語っている。

「現在の仕事には充実感がある。自分で何かやっていると嬉しい。責任を持てるのがいいですねえ。僕が今のところかなりまかされているのでミスはすれ

ば僕の責任ですが、それがなかなかいい。今の仕事をなんとか覚えて成功したい。俺はあれをした、これをしたというようになりたい²⁹」。

義務教育ないしそれに準ずる教育を終えた青少年は、N氏のように教育歴の形成を志向する場合もあるが、A君やB君のように、教育歴がさほど影響しない職業分野での経歴形成に向かう場合もある。

また両君の場合は、父親を親方として家業の手仕事についたわけであるが、最近の高卒者たちの中には、職人が不足気味の住宅産業界等に訓練生として雇われていく者もある。企業の中には、自前の職業訓練校を開設し、職人の養成をしたり、そこを出れば管理職への道も開けるようにしているところもある³⁰。

(2) 熟練工を目指す

N氏の第2回目の岐路は、海軍航空廠技手教習所を半年でやめたときである。N氏の場合は、もっと勉強できるということで教習所に入学した。だがそこでの学課や実習は、中学で学べることは違うし、将来の仕事も中学出がやるような仕事ではないことから、N氏は帰郷してしまった。

だがN氏と同じ状況に置かれた当時の農村出の青少年にとって、ソロバン以外の技能を身につけるとすれば、職人などになることであった。「官費」で学べ、「技手」の資格もとれる教習所に魅力を感じた若者も大勢いたにちがいない。民間会社の熟練工を目指した青少年も多かった。

戦前と戦後では社会的背景や技能者養成システムに相違はあるが、昭和30年代の高度経済成長期にも、養成工として大企業に就職し、ひたすら熟練工を目指した若者がいた。

例えば、田舎の新制中学を出て、大手の造船会社に入社として採用され、そこで働いてきた21歳のC君は、入社間もない頃について次のように述べている。

「入社後は現場の実習と教育課での教習と寮の生活が私たちの生活のすべてであった。生活環境のあまりにも大きな変化のために、不安と不馴れできょろきょろしながら私はその環境にだんだんと順応していった。最初の1ヵ月余りは自分の意志で行くことは殆どなく、すべて命令的な力に引きずられて生活するだけであった。その間、私は生活の急変についてゆくことと、必要な知識を得ることに精一ぱいで、自分をふりかえてみる余裕もなく、考えてみる暇も全然なかった。……」³²。

C君のような若者は、一方で技能資格を取得しながら、また他方でいろいろな仕事を实地に学びながら、それぞれの職場で自立していったにちがいない。

例えば昭和46年に中学校を卒業し、機械工見習として〇〇製作所(従業員5,000人)に就職したD君の場合、3年制の企業内訓練校を卒業し、さらにその後6年

間で旋盤 2 級技能士→ボール盤 2 級技能士→ボール盤 1 級技能士の資格を取得し、ボール盤工として自立している。26歳の時点で部下も一人いる。

また昭和44年に中学校を卒業したE君の場合、最初の勤務先(従業員940人)に訓練生として入社したが、技能者養成所に対する認識不足とホームシックのため2ヵ月で辞める。しかしすぐに現在の勤務先に就職する。以来26歳までの経歴は、TVキャビネット製作課での塗装員→カラーTVの販売員→キャビネットにTVのブラウン管を取り付ける組立員→家電販売員→TV組立員→電話交換機組立員→TV組立員→量産小物組立員(見習の指導者)となっている。そして26歳の時点で、テレビその他の電子組立に関する知識や技術を身につけることに「一生の仕事」を見だしている。

いうまでもなく熟練工や技能員は、C、D、E君のように事業所内の教育訓練によって養成される場合もあれば、事業所外の公共職業訓練機関で養成されることもある。また現代では高卒男子の2人に1人以上が、事例のようなブルーカラーとして経歴形成を開始しているといつてよい。

(3) ブルーカラーからホワイトカラーを目指す

職工として働きながら職長になることは可能であっても、職員になることは並み大抵なことではなかった時代に、N氏は専門工になるのがいやで、海軍航空廠技手教習所を辞め、家業の手伝いをしながら勉強をし、ホワイトカラーを目指したといつてよい。

勤労青少年にとって、状況は戦後も同じであった。それゆえ工員としての将来にある程度満足しつつも、向学心のある青年の中には、職場で学歴のない悲哀を経験し、大学出に負けなように、もっと学ぼうと決意した養成工もいた。先のC君同様、養成工としてT社に入り定時制高校に通うF君は、次のように語っている。

「……しっかり勉強して養成所を出れば、定年までT社で働けるのだから将来も安定しているし、こんなよいところはないかも知れない。でも毎日の単調な仕事を一生つづけることを思えばたまらなくなる。高校出の若い技師(技術職員)に文句をいわれたりすると、何くそいまにみろという気持ちになる。ぼくらの寮でも時々話すのだが、高校出て会社に入ったものと、養成工出の定時制にいつている者と、やっている仕事も能力もかわりないのに、待遇だけがちがう。だから、ぼくは、定時制高校を出たら大学まで入って、大学を出て会社に入ったものより上になってやりたいと思う……」。

F君とは異なる動機で大学を目指す青年もいた。高校を出て就職したが、自分のしたい仕事は大学を出なければつけないことに気づき、N氏のようにやりたいことをするために経歴の軌道修正に取り組む場合が、それである。

例えばG君の場合は、昭和48年に県立工業高校電気科を卒業し、〇〇電気（従業員149人）に電気機器の組立工として入社した。しかし「希望した会社に就職できなかった」「仕事がやさしすぎた」などから、1年2ヵ月後にその会社を辞めた。「就職しないで進学すればよかった」と後悔することもあったG君は、2年後の昭和52年に夜間の国立工業短期大学電気工学科に入学する。大学時代の3年間はアルバイトとして〇〇精機という会社で精密測定機械の調整修理をしていた。そして卒業と同時に現在の勤務先〇〇電機製作所（従業員390人）に入社し、「新製品開発」にあたっている。いまの仕事には「誇りがもてる」「やりがいがある」「創意や工夫が生かせる」と思いながらも、全体としてはまだ満足していない。26歳のG君は、さらに電気主任技術者を^{on}目指している。

(4) ホワイトカラーを目指す

N氏の第3回目の岐路は、五高入学以後にあったといつてよい。五高でドイツ語を学び、東大の独文科に入学したことが、結局、N氏の「自分探し」に深く影響した。医学部や教育学部の学生の多くが、そうした学部に入ることによって、さらに医師や教師といった職業へ社会化されていくのと同様、N氏はドイツ語やドイツ文学に専心することになり、それらを生かせる仕事や職業の中に「職業人としての自分」を探しだしたにちがいない。もしN氏が法学部や経済学部に入學していれば、そこで学んだことを生かせる別の職業の世界に「職業人としての自分」を探しだしたであろう。どんな高等教育を享受するかによって、青年のその後の職業経歴は、大筋が決定されるとみてよい。とくに専門的・技術的職業従事者の場合は、そうである。

ところでN氏の時代には、高等小学校卒業後、少年事務員とか書記見習として就職し、やがて事務員や書記となっていく若者もいた。中等教育がそれほど普及していない時代には、さらに中・下級管理職を目指すことも可能であった。戦後もしばらくはそうであった。

例えば昭和26年に中学を卒業し、中京地区にある従業員50人程度の紙製品製造工場に入社したH君の事例が、それである。事務員として入社したH君は、働きながら定時制高校の商業課程と夜間大学の商科で学び、この経験を仕事に生かし、その後28歳で営業課長となり、部下を7人もつにいたった。ちなみに従業員も入社当時の3倍^{on}になっていた。

しかしH君のように新制中学を出て初職を事務職でスタートする経歴は、高校進学率がまだ40～50%の段階であればこそ可能であった。現在では高卒男子で初職を事務職でスタートできるのは、約1割である。つまりホワイトカラーになるには、大学にいくことが不可欠となってきた。大卒の場合も、工学や理学系

出身者は、そのほとんどが技術者などになっているが、社会科学系出身者の場合、初職を事務職でスタートする人は、2人に1人となってきている。

事務部門や技術部門で初職をスタートする若者は、やがて管理職や専門職の地位を獲得し、さらには経営者へとその経歴を形成していく可能性がある。企業の中には、従業員が主体的に経歴形成できるようにと、キャリア・ディヴェロップメント・プログラム（CDP）を開発しているところもある。例えば新入社員から部長クラスまでの階層別研修や技術者・セールスマンなどの機能別研修を体系化した「社内教育訓練」もあれば、社員を海外留学させたり、各種セミナーへ参加させる「社外教育訓練」もある。また「自己啓発」の奨励もよくなされる。任意の自主学習が奨励される場合もあれば、指定自主学習といって社内試験等にかかわる特別な勉強が奨励される場合もある。²⁸

ホワイトカラーの若者は、実務経験と同時に、こうした教育訓練や自己啓発を通し、徐々に管理職や専門職への階段を一步一步登っていくことになる。しかし、職場で主体的に能力開発や経歴形成をすることは困難も多い。研修システムや人事管理のあり方も職場によって異なるからである。

(5) ホワイトカラーの転職

ホワイトカラーになっても、勤務先の期待する会社人間になりきれず、新たな「自分探し」をする若者もいる。それはN氏がG書房で体験したように、「本当にしたいことをしていない」と気づくからである。もちろん不満や不安を感じながらも、勤務先やそこでの仕事に徐々に慣れ親しんでいく場合もあるが、次のように経歴の軌道修正を目指す場合もある。²⁹

I君は〇〇大理学部を卒業し、〇〇製作所に入社。勤務先もそこでの仕事も希望通りであった。大学3年の時に留学試験にパスして、オランダの大学で3ヵ月間コンピューターのソフトウェアを学んだ経験もあり、会社からも将来を期待され、科学技術用大型コンピューターのプログラム開発に携わっていた。だが、次のような不満や不安から、1年8ヵ月で辞めた。自分の時間が持てないこと、給料が安いこと、会社の経営管理に腕をふるうゼネラリストを志望しているが、会社はシステム・エンジニアのスペシャリストに育てようとしているらしい、以上が辞めた理由である。

辞表をだしても受理されず、3ヵ月間、工場長あずかりになっていた。I君はこの「不安定な3ヵ月間」の間に外資系コンピューター会社の中途採用試験を受けて合格し、そこに勤務することになる。新しい勤務先は、完全週休2日制で、このほか週に1日は〇〇工大大学院で経営工学を聴講させてもらっている。残業も少ない。将来については、30歳までに自分のやりたい仕事を社内に確立し、社

230 自由研究

内試験にうかって2、3年留学し、40歳までに管理職としてコンサルティング業務に腕をふるう立場に立つ考えでいる。そしてさらにI君は、私生活の充実も目指して頑張っている。

J君は〇〇大学経済学部を卒業し、〇〇食品に入社。配属先は東日本の営業所を統括するスタッフ部門で、責任ある仕事をまかされ、やりがいを感じていた。入社時の適性検査でも「営業向き」と判定された。だがそんな営業の仕事がどうしても好きになれなくなる。「ハタタリと押しのきく」営業マンになれそうもないと自覚し、1年で辞めることになる。

その後、小さな建設会社に再就職し経理課員として働いているが、週3回経理学校の夜間部に通い簿記や法律を学んでいる。将来は税理士や公認会計士の資格を取得し、郷里で父親と一緒に税務会計事務所をやれるようになればと頑張っている。

ちなみに若者の中には、職場の将来性に不安を感じ事務員から調理師などを目指す場合もある。次のK君の事例がそれである。

K君は下請けの建築会社で事務を7年している高卒の27歳の青年であった。オイルショック後の不況の中で、何か技術を身につけ不況に強い職業への転職を考えていた。調理師やボイラー技士を目指そうとしたが、色弱のため転職できるかどうか不安であった。そこで某相談室に行った。第1志望の調理師は色弱でもなれることを確認してから、1年間調理師専門学校に通い日本料理を専門に学んだ。そして学校に求人があった某公共団体経営の保養所で働けることになった。

以上からもわかるように、教育訓練や自己啓発が職業経歴の転機と結びつくような職能資格制度や人事管理システムがあったり、転職者を受け入れる中途採用の慣行がある場合には、学習による職業経歴の主体的形成を期待できる。労働市場が人手不足であれば、さらにそれを期待できる。またそうした場合には、主体的経歴形成を目指す青年の学習も活性化するであろう。

4. おわりに

本稿でとりあげた男子青年の事例研究から、次の3点を指摘できる。

1) 主体的経歴形成を目指す青年の学習は、成人のリカレント教育と同じく、その後の生き方に大きな影響を及ぼす。

2) 能力のはかに向上心・やる気・学習意欲などがあれば、経歴の主体的形成はある程度可能である。ただしホワイトカラー、とくに専門的・技術的職業分野における経歴形成は、一定の教育歴や資格を前提とせざるをえないから、職業経

歴の前に教育歴の形成が不可欠となる。

3) 主体的経歴形成を目指す青年の学習を活性化するためには、いつでも途中から経歴の軌道修正が可能となる一層柔軟なシステムを工夫することが必要である。例えば学校間や学科間における生徒や学生の移動に対する制度的配慮、あるいはバイパスルートによる入学・編入に対する教育機関の一層の門戸開放などによって、主体的教育歴形成を目指す学習はさらに活性化するであろう。また主体的職業経歴形成を目指す学習の活性化は、職場内や職場・職業間での地位や職務の移動条件が、どれほど学習と結びついた業績に基づいているかということにも依存している。

もちろん以上で総てが究明されたわけではない。また本稿で取り上げた事例以外にも、主体的経歴形成を目指し学習している青年はいる。農業、商業、運輸・通信などといった産業部門にも、主体的経歴形成を目指し学習している青年がいる。サラリーマン (employee) から自営業主 (employer) へと経歴の軌道修正を目指す学習している青年もいる。また青年の中には、「私生活」重視で、仕事は収入を得るための手段と割り切り、生きがいを「仕事以外の生活」に求め、余暇生活の充実を目指して学んでいるものもある。これらの若者について本稿では取り上げることが出来なかった。残された課題として指摘しておく。

注

1. 以下の論文や調査研究などを参照した。

Nosow, S, and Form, WH, (ed.), *Man, Work and Society*, Basic Books, New York, 1962, pp. 284-332. Slocum, WL., *Occupational Career*, Aldine, Chicago, 1966, pp. 226-263. Taylor, L., *Occupational Sociology*, Oxford University Press, 1968, pp. 189-295. Super, DE, and Bohn, Jr, M., *Occupational Psychology*, Wadsworth Publishing Company, 1970. 藤本喜八・大沢武志訳『職業の心理』ダイヤモンド社, 1973, pp.175-238. 雇用促進事業団職業研究所編『日本人の職業経歴と職業観』至誠堂1979, pp.1-117. 同研究所編『1981年職業移動と経歴調査報告書』1983. 同研究所編『青年期の職業経歴と職業意識』1988。

2. 新井真人「内航船員の形成過程と教育」(『湘北紀要』第6号, 湘北短期大学, 1982) pp. 1-20。
3. 浜口恵俊・徳岡秀雄・今津孝次郎「日本人における成人社会化の基本特性—社会的経歴の分析を通して—」(『教育社会学研究』第31集, 1976) pp.40-53。
4. 山村賢明「日本における社会移動の様式と学校」石戸谷哲夫編著『変動する社会の教育』第一法規, 1976, pp.163-184。

232 自由研究

5. 中野孝次『わが体験的教育論』岩波書店, 1985。
6. 中野孝次『前掲書』p.17。
7. 中野孝次『前掲書』p.39。
8. 中野孝次『前掲書』p.50。
9. 中野孝次『前掲書』p.pp.72-73。
10. 中野孝次『前掲書』p.112。
11. 中野孝次『前掲書』p.120。
12. 中野孝次『前掲書』pp.120-121。
13. 中野孝次『前掲書』p.124。
14. 中野孝次『前掲書』p.124。
15. 「バイパスルート」については、次の文献を参照した。天野郁夫『教育と選抜』第一法規, 1982, pp.181-186。
16. T氏の事例は, 1985年7月, 学外での筆者の議義に対するレポートとして提出されたものである。
17. 早坂泰次郎『職場の中の青年期』誠信書房, 1962, pp.95-96。
18. 宮地誠哉・倉内史郎編『職業教育』開隆堂, 1975年, 片岡栄美「定時制高校卒業生における地位達成」(『大阪大学教育社会学・教育計画論研究集録』第4号, 1983, pp.125-143)等を参照。
19. 青少年職業態度研究会『大都市の青少年における職業観の形成と職場への適応』1961, p.60。
20. 陣内靖彦・金子養正『大都市工業高校における適応と逸脱に関する事例研究』東京学芸大学教育社会学研究室, 1981, pp.145-147。
21. 読売新聞(朝刊), 1989年5月12日。
22. 早坂泰次郎『前掲書』p.89。
23. 雇用職業総合研究所編『前掲書』1988, p.235。
24. 雇用職業総合研究所編『前掲書』1988, p.213。
25. 早坂泰次郎『前掲書』p.94。
26. 雇用職業総合研究所編『前掲書』1988, p.223。
27. 労働省婦人少年局『中学校卒業就業者の成長過程に関する調査』年少労働調査資料第58集, 1968, p.55。
28. 産業労働調査所編『能力開発事例集』産業労働調査所, 1984, 同所編『OJT推進事例集』1985, 等を参照。
29. 日本経済新聞社編『ドキュメント サラリーマン』新潮社, 1984, pp.40-50。
30. 全国勤労青少年会館編『働く若者の相談実態』昭和50年度, 1976, pp.48-50。